

墓の変化から見る韓国の家族

澤野 美智子*

Considering Korean Family through the Transformation of Funerary Culture

SAWANO Michiko

要旨

本研究では、墓の変化から、韓国の家族の変化について検討した。韓国では従来、死者を土葬して墳墓を作り、墓はその死者の父系子孫に風水的な影響を与えると考えられてきた。しかし近年の韓国においては、埋葬方法は土葬から火葬へ、墓の形態も墳墓から納骨堂へと変化しつつある。

従来の墳墓も、建立者として床石に名前を刻む範囲が父系制にとらわれなくなっている。直接見知っている範囲を、故人の家族として認識する傾向が見られる。人々は親密圏としての家族における個人の死を、系譜の連続性に組み込んでいる。さらに納骨堂においては、故人に宛てた手紙や家族写真を他人の目にも触れるように展示する行為が見られる。墓は、家族として行動する場であり、その行為を通して家族のつながりを生み出す場ともなっている。

人々は、従来の父系制に基づく家族の枠から解放され、情緒的な連帯を基準とした親密圏としての家族を再構築するようになっている。ただしその情緒的なつながりによる親密圏としての家族は、連続性をもつ系譜に組み込まれることによって体面を誇れるものとなる。韓国の家族は、情緒的なつながりと系譜の連続性の両方が強調される様相を呈している。

他言語要旨

본 연구에서는 묘의 변화를 통해 한국 가족의 변화에 대해 검토하였다. 한국에서는 원래 시신을 매장하여 분묘를 만들었고 묘는 고인의 부계 자손들에게 풍수적인 영향을 미치는 것으로 생각되어 왔다. 그러나 요즘은 한국에서는 매장에서 화장으로, 묘 형태도 선산에 분묘를 만드는 방식에서 납골당으로 각각 변하고 있다.

종래 형태의 분묘도 상석에 이름을 새기는 범위가 부계제 틀에서 벗어나고 있다. 얼굴을 직접 아는 범위를 고인의 가족으로 인식하는 경향을 볼 수 있다. 사람들은 정서적 유대인 가족에서 일어난 개인의 죽음을 계보의 연속성 속으로 자리하도록 한다. 또 납골당에서는 고인에게 쓴 편지나 가족 사진을 남들도 볼 수 있게끔 전시하는 행위를 볼 수 있다. 묘는 가족으로 행동하는 장소이며 그 행위를 통해 가족간의 유대를 생산하기도 하다.

사람들은 부계제에 기초한 종래의 가족 틀을 벗어나 정서적인 유대를 바탕으로 한 가족을 재구성하고 있다. 단 그 정서적인 유대에 의한 가족은 계보의 연속성 속에 자리함으로써 여전히 명맥을 유지하게 된다. 한국 가족은 정서적인 유대와 계보의 연속성 모두가 강조되는 양상을 보이고 있다.

キーワード：韓国の家族、父系制、家族としてつながる、床石、納骨堂

*神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程

目次

1. はじめに
2. 韓国の墓をめぐる状況
3. 墓の変化を読み解く
 - 3.1. 墓の床石の側面に刻まれる人物の変化
 - 3.2. 既婚女性と実家・婚家の祖先との関係
 - 3.3. 父方・母方の祖先との関係
4. 家族がつながる場としての墓
5. おわりに

1. はじめに

韓国の家族に関する研究では、父系血縁のつながりが重視されてきた。その土台を築いたのは、韓国の家族に関する構造主義的研究であった。そこでは父系制の出自律に基づく家族の構造や類型の分析に関心が集中していた [여중철 1977; 이광규 1977; 최백 1981; 김두현 1994]。

近年の研究では、産業化とともに韓国の家族のあり方が変化したことが指摘されている。しかし西洋的な意味での変化が起こったわけではなく、「伝統的」要素も根強く存在していることが指摘される傾向にある [조혜정 1986; 정영애 2010; 이재경 2011]。その「伝統的」要素として挙げられる代表的なものが、父系制、家父長制、儒教文化である。

これら「伝統的」要素が残存しているという考え方は、韓国の女性研究者やフェミニストらによる家族研究によっても大きく支えられ、男性中心的な状況のなかで女性たちが不利な状況に置かれているという主張の材料として用いられてきた。フェミニストらの研究は、韓国の女性解放運動とも連動するものであった。特に 1980 年代後半、女性解放運動の中で実現された家族法改正には、フェミニストらによる家族・親族研究が少なからぬ影響を与えたと考えられる。

この流れの中で、韓国の家族が父系制、家父長制、儒教文化といった要素をもつという論がマスターナラティヴ化していった。例えば大学教育を受けていない人でも、筆者が韓国の家族について研究していると述べると、まず「韓国の家族は家父長的でしょう」「儒教の影響が強いですよね」などと口にする。しかしこのようなマスターナラティヴ化は、女性解放というフェミニストたちの意図とは逆説的に、韓国の家族に関する研究を、父系制、家父長制、儒教文化という男性中心の枠組みの中に閉じ込め、それ以外の枠組みから理論を構築することを困難にしてきたとも言える。

先行研究の中には、姻戚関係の重要性に注目した研究 [李・末成 1973; 丸山 1983; 末成 1986]、あるいは女性の担当する家内的領域やシャーマニズムに注目した研究 [重松 1982; 安田 1997] など存在する。しかしこれらも父系制、家父長制、儒教文化という枠組みを乗り越えるものではなく、あくまでもその枠組みの中でのつながりの多様性、あるいはそこから排除される人々のあ

りかたについて検討するものであった。

人類学全体を見てみると、人類学において家族・親族研究は、その初期から長い間にわたって大きな位置を占めてきた。19 世紀後半、モーガンは親族名称体系の比較分析を行い、親族名称体系を用いて人類の家族・婚姻制度の進化の道程を解明しようとした [Morgan 1877]。これに続く 20 世紀前半の人類学においては、親族制度や出自規則の分析が研究の中心に位置づけられるようになった。具体的な代表例としては、構造機能主義の観点から分節リネージ体系のモデルを作りだしたり [Evans-Pritchard 1940]、諸親族集団の類型化と、比較研究を通じた一般的な原理や法則性の抽出を試みたり [Radcliffe-Brown 1952]、社会構造を抽象的な構造観として提示し、人類学の研究において構造主義的な方法の有効性を示そうとしたり [レヴィ＝ストロース 1978]、親族名称全体を成分分析の手法で分析し、そこに表れる規則を読み取ることで、比較と類型の構築をしようとした [Goodenough 1970] するなどの試みがさかんに行なわれた。

しかし 1980 年代以降、家族・親族という概念自体が根本的に問い直されるようになった。その決定的な役割を果たしたのが、シュナイダーであった。シュナイダーは、自らの調査したミクロネシアのヤップ諸島の「親族集団」について、親族集団としてではなく土地を媒介とした集団として解釈した方が適切であることを指摘した。そのうえで、親族関係が独立した領域として存在することを前提としてきた、モーガン以来の親族研究全体を批判した [Schneider 1984]。シュナイダーの主張により、人類学の家族・親族研究は根底からの批判にさらされ、大きな打撃を受けた。また社会変化の中で、それまで普遍的な基礎単位と見なされてきた夫婦関係や親子関係の枠組みに入りきらない生活形態が広く出現したことも、家族・親族について普遍的に論じることを困難にしてきた [河合 2012: 26]。

人類学のそのような状況にもかかわらず、韓国の家族について論じる研究者たちは今日に至るまで、父系制、家長制、儒教文化の枠組みに基づく研究を量産してきた。そのため、人類学全体の研究のなかに、韓国の家族に関する研究を位置づけると、1980 年代のシュナイダー・ショック以前のレベルにとどまっていると言わざるをえない。

従来の韓国の家族研究が重要視するもののひとつが、父系の血縁によるつながりである。そしてそれを示す代表的なものが、墓である。後述するように韓国では、墓はその埋葬者の父系子孫の繁栄や衰退などに影響を与えると考えられている。そのため墓は族譜（家系図）とともに、韓国の家族研究の扱う重要な対象となってきた。

しかし近年の韓国においては、墓の変化が見られる。具体的には、都市部を中心に、埋葬方法が従来の土葬から火葬へ、墓の形態も従来の墳墓から納骨堂へと変化しつつある。父系血縁のつながりを示す墓の変化は、家族のありかたとどう関わっているであろうか。また、父系制、家長制、儒教文化という従来の枠組みとは異なった視点でこの現象を見ると、どのような家族の姿が浮かび上がってくるであろうか。

このような問題意識から、筆者は韓国の全羅道 A 郡（2011 年 4 月から 7 月）（注 1）および京畿道 K 市（2013 年 3 月）においてフィールドワークを行った。全羅道 A 郡では、ホームステイ

した家での参与観察、およびA郡Y面K里内に点在する墓についてのデータ収集を行った。京畿道K市では納骨堂での参与観察を行った。

2. 韓国の墓をめぐる状況

韓国における家族・親族と墓の関係性は、以下のように論じられてきた。

まず、韓国の墓は風水と関連が深い。墓地風水、つまり地に埋められた祖先の骨がその地の生氣を受けて子孫が繁盛するという考えが広く共有されている [최길성 2010 : 272]。風水の考えによれば、利益や災難は、地下水や鉱脈のように地中を流れる神秘的な力によって引き起こされる。また風水においては、地の生氣が子孫に影響を与えるものと考えられているため、死者との生前の人間関係や死者の人生観、子孫の孝行の度合などは考慮されない。骨に靈魂が残り、祖先の骨からの気脈が子孫に流れると考えられている。そのため、祖先の骨を埋める位置は、風水の専門家などの助言を受けて慎重に選ばれる。

そして、風水による墓の位置のよしあしは、埋葬者の父系子孫に影響を与えると考えられている [ジャーネリ 1993 : 103]。ジャーネリによれば、墓の位置が父系子孫に及ぼす影響は2種類あり、ひとつは祖先の意志（墓の位置に対する不満）によるもの、もうひとつは機械的なもの（風水）である。「墓に突き当たった生命力は、どのような力であれ祖先の骨を貫通して流れ、やがては父系子孫に影響を及ぼす」 [ジャーネリ 1993 : 104]。よって父系子孫一族の繁栄も、家系の断絶や多産も、このような力の影響によるものとされる。言い換えれば、風水的影響を通して、故人と父系子孫は密接につながっている。なお女性の場合、未婚のうちは父系祖先の風水的影響を受けるが、結婚してからは夫の父系祖先の風水的影響を受けるとされている [최길성 2010 : 279]。

ところで近年は、韓国において埋葬方法や墓の形態が著しく変化していることが指摘されている。埋葬方法としては、朝鮮時代に土葬が一般化し、火葬は「異常な」死の場合や経済的に余裕のない場合に限って行なわれてきた。また火葬は、死者と生者のつながりを完全に断絶するものと考えられるため忌避されてきた [中村 2001]。しかし近年、土葬から火葬への変化が見られ、火葬の割合は2000年には3割、2008年には6割を超えている [田中 2010 : 23]。その背景には、人口増加や都市化による土地不足の問題、行政の指導、市民団体による火葬推奨運動などがあった [中村 2001]。

土葬から火葬へという埋葬方法の急激な変化について、中村は次のように考察している [2001]。火葬を妨げていたのが「孝」の論理であった。しかし理念的には土葬であるべき遺体処理法が火葬へと移行する過程において、「孝」の解釈も柔軟に行われるようになった。「孝」の表明に墓は欠かせないが、その墓を造るには骨さえあればいい。火葬しても骨が残ることが、「孝」と矛盾しない。また親の遺言に従うことや火葬後に墓を造るといったことで「孝」を示せると考えられるようになっていく。

さらには火葬化の動きともあいまって、墓の形態も墳墓から納骨堂へと変化しつつある。従来

であれば風水的にすぐれた場所（主に山の斜面など）に広い土地を買い、土饅頭型の墳墓と、それを取り囲むようにした半円形の芝生の広場が整備されていた。しかし都市化や土地不足などにより、都市部を中心として遺骨を納骨堂へ安置する動きが広まっている。納骨堂を始めとする納骨施設は、1980 年代後半になって整備が始まり、1990 年代以降、多様な形態の納骨施設が設置されるようになった [田中 2011]。

このような納骨堂の増加は、単に埋葬方法の変化だけでなく、生者と死者のコミュニケーション方法や、非正常な死の扱い方をも変化させているという指摘がなされている。田中によれば、納骨堂への変化は、死者とのコミュニケーション方法の変化につながっている。例えば納骨堂で多用される故人の写真は、従来の墳墓に比べ、訪問客の想像力をより直接的に刺激する。このように「死者に見られる」ことによって、訪問客は「死者との出会い」を具現しようとしている [田中 2010]。

また丁によれば、韓国では「従来は天寿を全うし、死後祀ってくれる子供に見守られるなかで衰弱して死ぬことが〈理想の死〉、〈正常の死〉と考えられ、それに当てはまらない早死、事故死、自死、無縁死などは〈非正常の死〉とされ、儒教式の死者儀礼・祖先儀礼の対象にはされていなかった」[丁 2012: 61]。しかし納骨堂は従来の墓と違い、非正常な死に方をした者を、長幼の序に縛られずに祀ること（例えば親が子を祀るなど）を可能にしている。

以上のように先行研究で指摘されていることは、墓をとりまく事象について考える上では有用である。しかし韓国の家族・親族のつながりを示す上で重要視されてきた墓が変化しているという事態にもかかわらず、墓の変化が家族・親族のありかたとどう関わっているのかについては検討されてこなかった。そこで以下の章では、まず従来の墳墓の床石に刻まれる人物の変化について検討し、次に納骨堂という新たな現象について検討する。そしてそれらの変化から、韓国の家族のあり方について考察してゆく。

3. 墓の変化を読み解く

3.1. 墓の床石の側面に刻まれる人物の変化

まず従来の墓の形態である墳墓に関する変化について検討する。朝鮮時代以降、韓国の墓は一般的に、遺体が埋葬された地面の上に築かれた土饅頭状の墳墓と、その周辺の山林を私有して造られる形態をとってきた [田中 2010]。墳墓とその周辺の山林は「祖先への孝と礼を尽くす儒教理念の実践の場として、一族の結束と紐帯の象徴として機能してきた」[丁 2012: 273]。

さらに墳墓は、一族の富と威信を示すものでもある。経済成長期に富を成した人々によって「豪華墳墓」が築かれ、それらが 1970 年代から 1990 年代にかけて政府の取り締まりの対象になったこともあった [田中 2010]。上流階級にとどまらず、経済成長によって生活に余裕の出た一般庶民が墳墓に投資し多様な石造装飾物を置くようになったのも、同時期以降の動きであると考えられる。このことは、本稿付録の調査データにおいて、1970 年代以前に建立された床石が

ほとんど見られないことからわかる。

墳墓の前に置かれる石造装飾物のなかで代表的なものが、床石である。床石とは「墓前でのチェサの際に〈祭需〉（供物）を載せるのに使う方形の石のことで、正面には故人の本貫・姓名・号や坐の方角、側面には床石を据えた年月と携わった子孫の名が刻まれる。従って、床石は特定の墓に眠る故人の〈名〉を後世に伝え、墓が遺失されるのを防ぐ記憶装置となる」（注2）[本田 1993: 152]。

従来であれば、個々に刻まれる建立者は、故人から見て直系男性子孫のみであった。その背景には孝の考え方がある。本田は孝に関して次のように述べている。「子の親に対する敬愛を意味する孝は、世代間の序列を裏付ける規範として、韓国人の家族・親族関係の規制や村落社会の秩序維持に作用してきた」[本田 1993: 143]。死者を祀る行為は、生前の父母に対する孝を、死後の父母や祖先へ延長したものと見なされる。祖先祭祀は「原則として遡り得るすべての父系祖先に対して定期的に行なうことが、子孫としての道理と見なされてきた」[本田 1993: 143]。ここで祀らねばならない対象は父系祖先であり、祭祀を担うべき人物は直系男性子孫である。

一方女性は、「出嫁外人」という言葉にもあるように、婚出すれば実家のメンバーとは見なされなくなるとされてきた。また婚入先でも家系を継承し祖先祭祀儀礼を執り行うのは男性であるため、女性はシデクの祖先祭祀に関わる地位においては周辺的な存在となる。そのため女性の名前は、祀られる祖先として（多くは生前の名前ではなく本貫および姓に「女」という表記であるが）床石の正面に刻まれることはあっても、建立者として床石の側面に名前が刻まれることは、実家においても婚家においてもない。

しかし近年、娘や嫁など、直系男性子孫以外の人物の名前を、建立者として床石の側面に刻む現象も見られるようになってきている。ここで全羅道 A 郡の B 氏の事例を見てみよう。筆者は B 氏の家にホームステイをしながら参与観察を行った。

韓国の二大名節である秋夕（太陽太陰暦の盆）の朝、B 氏の妻は墓参り用の食べ物を風呂敷に包んだ。それを持って、B 氏とその長女、長男、次男は近くの山にある墓へ向かった。先祖代々を祀る広い墓があったが、2008 年に新たな墓を建てて B 氏の父親を分祀したという。墓の床石の側面には、【写真 1】のように、墓の建立に携わった親族の名前が刻まれている。

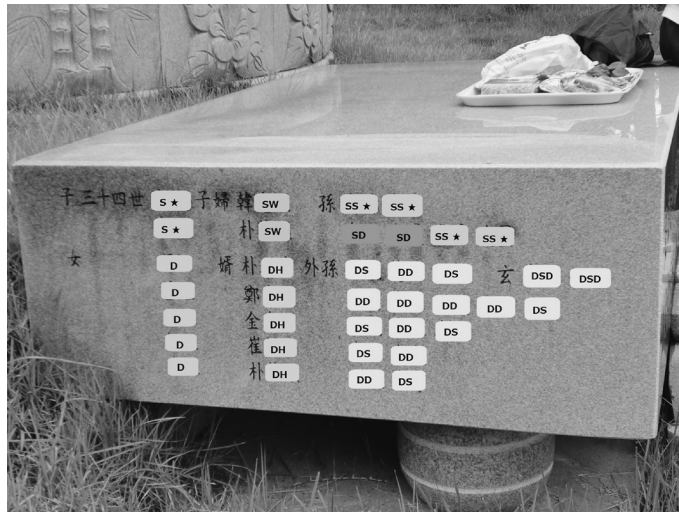


写真 1 墓の床石の側面に刻まれた建立者名（筆者撮影、個人名部分は筆者編集）

アルファベットは墓に祀られた B 氏の父親を基準に、S（息子）、D（娘）、SW（息子の妻）、SD（息子の娘）、SS（息子の息子）、DH（娘の夫）、DS（娘の息子）、DD（娘の娘）、DSD（娘の息子の娘）を示した。【写真 1】で名前が刻まれた人物の属性を床石の順序どおり表記すると、次のとおりである。

表 1 写真 1 で名前が刻まれた人物の属性（床石の順序どおり表記）

S ★	SW	SS ★	SS ★			
S ★	SW	SD	SD	SS ★	SS ★	
D	DH	DS	DD	DS	DSD	DSD
D	DH	DD	DD	DD	DD	DS
D	DH	DS	DD	DS		
D	DH	DS	DD			
D	DH	DD	DS			

先述したように、床石の側面には故人の直系男性子孫の名前のみ刻まれるのが一般的である。【写真 1】では星印を付けた 6 人（B 氏の兄、B 氏、B 氏の兄の息子 2 人、B 氏の息子 2 人）がそれに該当する。

しかし B 氏の父親を祀る墓の床石の側面には、B 氏の兄の妻や娘、B 氏の妻や娘、さらには既に婚出した B 氏の姉妹とその夫および子どもや孫の名までが建立者として刻まれていた。つまり故人にとっての娘、嫁、娘の夫、外孫、外ひ孫の名までが刻まれていることになる。この現象は、B 氏の家だけに見られる特殊な現象であろうか。

B氏夫婦は全羅道A郡の中心部であるA邑に居住しているが、B氏の妻の実家は同じA郡内のY面K里に存在し、現在もB氏の妻の母親が暮らしている。そのため筆者はK里の墓の床石を調査するとともに、K里の女性たちを対象とするインタビュー調査を行なった。

墓の調査では、K里の山林に散在する墓の床石のうち、筆者の探しえた286基について、その側面に刻まれた建立者と故人との関係を調べた。ただし床石286基のうち、刻まれた文字が風雨で劣化して判読不能なもの、あるいは個人名のみ刻まれていて故人との関係が不明なものなどが52基あり、有効なデータが得られたものは234基であった。調査によって得られた床石のデータの内訳は、文末の付録のとおりである。

集めたデータについては、婚入女性、婚出女性、姻戚が刻まれているかどうかを基準として8類型に分類した。なお、「娘」として刻まれている者については、実際の婚姻状態は不明であるものの、婚出したか、あるいは今後婚出することが想定されている者として、婚出女性に区分した。また区分の便宜上、内孫息子は「息子」、内孫娘は「娘」、内孫息子の妻は「嫁」、内孫娘の夫は「娘の夫」のカテゴリーに入れた。

8類型は次のとおりである。

- ①直系男性子孫（主に息子や内孫息子、内曾孫息子など。遠い過去に亡くなった故人を祀った場合は、その故人から現在生きている子孫に至るまでの代々の直系男性子孫）の名字が刻まれたもの。つまり婚入女性、婚出女性、姻戚は刻まれていない。
- ②息子、娘、娘の夫などの名字が刻まれたもの。つまり婚入女性は刻まれず、婚出女性と姻戚は刻まれている。
- ③男性のみの名字が刻まれたもの。つまり女性は刻まれないが、娘の夫などの男性姻戚は刻まれている。
- ④息子、娘の名字が刻まれたもの。つまり婚入女性や姻戚は刻まれず、婚出女性は刻まれている。
- ⑤息子、嫁、娘の名字が刻まれたもの。つまり婚入女性、婚出女性は刻まれているが、姻戚は刻まれていない。
- ⑥息子、嫁、娘、娘の夫、外孫などの名字が刻まれたもの。つまり婚入女性、婚出女性、姻戚のすべてが刻まれている。
- ⑦息子、嫁、娘の夫などの名字が刻まれたもの。つまり婚入女性と姻戚は刻まれ、婚出女性は刻まれていない。
- ⑧息子、嫁の名字が刻まれたもの。つまり婚入女性は刻まれ、婚出女性や姻戚は刻まれていない。

この8類型に基づいて床石を分類した結果は次の表のとおりである。

表 2 類型別の床石の数

	婚入女性	婚出女性	姻戚	名前が刻まれている人物	n
①	×	×	×	直系男性子孫のみ	123
②	×	○	○	息子、娘、娘の夫など	27
③	×	×	○(男性のみ)	息子、娘の夫	27
④	×	○	×	息子、娘	26
⑤	○	○	×	息子、嫁、娘	1
⑥	○	○	○	息子、嫁、娘、娘の夫など	18
⑦	○	×	○	息子、嫁、娘の夫など	0
⑧	○	×	×	息子、嫁	7
○の場合の n (①～⑧合計)	26	72	72		

①類型が従来広く見られた方法であり、父系制の規律に従って直系男性子孫が記載される。今回の調査でも①類型が最多であった。しかし床石が新しいものであるほど、①類型以外のものが多くなる。特に、嫁、娘、娘の夫、外孫まで広く記載する⑥類型に至っては、2000 年代以降に設立されたケースが大部分であった。

婚入女性の名前を記載する場合、息子の妻や内孫息子の妻をメンバーの一員として認めていると見なすことができる。しかし婚入女性を含むケースは 26、全体の約 11% であり、婚出女性あるいは姻戚を含むケースに比べると少ない。

婚出女性の名前を記載する場合、娘をメンバーの一員として認めていると見なすことができる。婚出女性を含むケースは 72、全体の約 31% である。つまり全体の 3 分の 1 ほどの床石が婚出女性の名前を記載している。

姻戚の名前を記載する場合、娘の婚姻によって姻戚となった娘の夫や外孫をメンバーの一員として認めていると見なすことができる。姻戚を含むケースは 72、全体の約 31% である。つまり全体の 3 分の 1 ほどの床石が姻戚の名前を記載している。

また、興味深い現象として③類型がある。これは、嫁や娘は記載されていないにもかかわらず、息子と娘の夫が記載されている。床石の設立時に息子が未婚であったため嫁の名前が刻まれていないという可能性もありうるが、27 基の床石に同じような記載方法が見られることから、嫁がいるにもかかわらず記載されなかったケースも存在しうる。また娘の夫がいるからには娘が存在するわけであり、娘の名前を刻まずに娘の夫の名前を刻むのは意図的な行為である。この類型においては、姻戚をメンバーとして認めた上で、男性というジェンダー基準で、記載される人物が選ばれたと考えられる。

調査データから明らかになったように、婚入・婚出した女性や姻戚の名前を建立者として床石の側面に刻むという、従来見られなかったケースが相当な数におよんでいる。本田 [1993] は、自らが調査した床石のなかで「婿」と「外孫」の名前の刻まれたものが 1 基あることに言及して

はいるものの、あくまでもアブノーマルな事例として扱っている。しかし筆者の調査からは、婚入・婚出した女性や姻戚の名前を床石に刻むケースは、もはやアブノーマルとは言えない数に達していることが明らかになった。

故人と直接的な交流があったと思われる血縁者の名前を広い範囲で床石に刻んだり、あるいはジェンダーを基準として、娘の夫を含む男性親族の名前を刻んだりしている可能性がある。この現象からは、墓の建立者として名前が刻まれる人物の選択が、必ずしも父系制の原理にとらわれなくなっていることが指摘できる。このことは1960年代以降の韓国社会における家族の変化、すなわち父系制と儒教規範に基づく男児選好が衰退してきた動き[澤野2011]とも重なっている。

このような現象を読み解くため、次節では既婚女性と実家・婚家との関係に、そして次々節では男性と父方・母方・妻方の祖先との関係に注目する。

3.2. 既婚女性と実家・婚家の祖先との関係

前節で指摘した、娘や嫁の名前が墓の床石に建立者として刻まれる現象は、何を表しているであろうか。

墓が子孫に影響を与えるという考え方に立てば、墓の床石に建立者として刻まれた人々は、その影響を受ける代表的な人物であると言える。先述したように、従来のありかたにおいては、直系男性子孫がその該当者であった。また女性に関しては、未婚のうちは父系祖先の風水的影響を受け、結婚してからは夫の父系祖先の風水的影響を受けるとされてきた。

ところが前節では、婚入した女性（故人にとっての嫁）のみならず婚出した女性（故人にとっての娘）の名前までもが、墓の建立者として床石に刻まれるようになっていたことが明らかになった。このデータを、祖先——子孫間の墓を媒介としたつながりという観点から見ると、婚出した女性も実家の祖先とつながり、同時に夫方の祖先ともつながっていることが読み取れる。この節では特に、既婚女性と実家・婚家との関係に注目する。

既婚女性の、実家および夫方の親族とのこのような関わり方は、今日における名節（太陽太陰暦の正月および盆）の過ごし方にも表れている。かつて女性は結婚すると名節にも実家には容易に帰ることができなかった。筆者が行った、K里の女性たちへのインタビューにおいても、70歳代後半以上の女性たちは、名節だからといって容易に実家に帰ることはできなかったと語っている。

B氏の妻の母（92歳）の語り：

「姑がものすごく怖くて、（名節に実家へ）行かせてくれなかったの」（2010年4月10日）。

C氏（75歳）の語り：

「（名節には）当時は帰れなかったわよ。姑が餅を作って、行っておいでと言ってくれるときだけ、やっと実家に帰れたの」（2010年4月10日）。

D 氏 (86 歳) の語り：

「(名節に実家へ) 行けないときもあったし、行けたときもあったわ。舅らが承諾してくれたら帰れたの」(2010 年 4 月 10 日)。

上の語りからは、既婚女性が実家へ帰れるかどうかはその舅や姑の意向に左右され、正月や盆に実家へ帰ることさえ容易ではなかったことがわかる。

しかしそのような状況は変化しつつある。筆者は全羅道 A 郡 I 面の I 氏宅で 1 年間、同郡 A 邑の B 氏宅で 4 ヶ月間のホームステイを行ったが、いずれの家でも名節のときには既婚女性たちが、夫や子どもたちと共にまず夫方の家へ行って祖先祭祀を手伝い、そのあとは夫や子どもたちと共に実家に行って過ごすという現象が見られた。

例えば前節で挙げた B 氏の家の様子を見てみよう。秋夕(太陽太陰暦の盆)の当日朝、B 氏らが墓参りの準備をする頃、B 氏の妻の母親がやってきた。朝に自分の息子の家で祖先祭祀を見届けたあと、娘(= B 氏の妻)の家へ来たという。午後には B 氏の妻の姉、および B 氏の妻の姉の娘とその夫と子どもたちもソウル近郊からやって来て、にぎやかに夕食を囲んだ。いわば母系親族が集合したことになる。



写真 2 秋夕当日の夜に B 氏の家集まった親族(筆者撮影、顔部分は筆者編集)(注 3)

このように秋夕の当日に婚家で祖先祭祀と墓参りを済ませるや否や、既婚女性が夫や子とともに実家へ帰り、実家の姉妹とその夫や子どもたちで集まって、名節の連休のうちの長い時間を実家で過ごす、というパターンは、B 氏の家だけに限らず韓国で広く見られるようになっている。

つまり既婚女性と実家とのつながりは、婚家とのつながりに劣らないほど濃く重要なものとなっている。先行研究では、インフォーマルな行為(相談したり助けを借りたりするなど)の面で既婚女性と実家とのつながりの重要性が論じられることはあった[山根 2005]。しかしイン

フォーマルな関係のみならず、実家の祖先の墓の床石に子孫として名前が刻まれるということは、実家側も婚出した女性を家族の一員としてフォーマルに認めていることを示している。

3.3. 父方・母方の祖先との関係

前節では女性に注目したが、男性側から見ても変化が見られる。すなわち従来は自分の父系出自の祖先の墓にのみ名前が刻まれていた。しかし床石の変化からは、「サウィ (sawi; 娘の夫)」として妻方の祖先の墓に名前が記載されるケースも見られる。つまり妻の祖先も自分とつながる対象となっている。また男女問わず、「外孫」として母の祖先の墓に名前が記載されるケースも見られる。つまり父方の祖先だけでなく、母方の祖先も、自分とつながる対象となっている。

ここで再び、B氏の家の事例を見てみよう。B氏には4人の子どもがいる。そのうちの長男が、筆者の滞在中に警察官の採用試験に合格するという出来事があった。

韓国においては従来から就職先として公務員の人気が高く、近年は特に大企業への就職難や経済の不安定さから、公務員の人気が非常に高まっている。汚いものに触れる肉体労働として以前は忌避されていたゴミ収集作業員の仕事でさえも、近年は公務員的一种であるという理由から選好され、有名大学卒の学生が就職するほどである。そのような状況の中、警察官は花形の職業であり、B氏の長男も専門の予備校に通って受験勉強を続けてきた。

B氏の長男の合格の噂はすぐに近所中に伝わった。筆者がB氏の妻と町を歩いていると、行く先々で人々が「おめでとう」とか「おいしいものをおごりなさいよ」とか「ご飯を食べなくてもおなかがいっぱいでしょうね (注4)」などとB氏の妻に声を掛ける様子が見られた。B氏とB氏の妻はパソコンで何度も全北地方警察庁のホームページを閲覧し、合格者発表者一覧のページで長男の名前を確認したり、今回の試験の倍率を計算したりして、満足げな表情を浮かべていた。長男は、母のきょうだいたちと父のきょうだいたちに電話して合格を伝えた。

B氏は、B氏の母親とB氏の妻の母親、つまり長男にとっての父方祖母と母方祖母を家に招いた (注5)。そこにB氏の母親の弟と、B氏の妻が最も親しくしている近所の女性、筆者、B氏夫婦、B氏の長男を加えた計8人で食堂に行き、お祝いの料理を食べた。食事代は、B氏の母親が全額9万ウォンを支払った。

帰宅後、食事を共に食べた近所の女性は、B氏の長男に祝い金10万ウォンを持ってきた。これ以外にB氏の長男は、母の二番目の兄から口座への送金で30万ウォン、母から50万ウォンの祝い金を受け取った。

B氏は長男に、父母両家の墓参りをして祖先に吉報を報告するように言った。B氏の長男は車を運転し、家から車で10分ほどの場所にある父方祖先の墓に向かった。墓に着くと、紙コップに注いだザクロジュースと火を点けたタバコを供え、ジョル (jeol) と呼ばれる土下座のような礼を2回した。この墓にはB氏の父親が埋葬されている。火を点けたタバコが供えられたのは、B氏の父親が生前タバコを吸っていたためである。

先述したように、この墓は2008年にB氏の父親のみを分祀して新たに造った墓である。その

ため分祀する以前の、B 氏の父親よりも上の世代の祖先が埋葬された墓は、別の場所に存在する。しかし B 氏の長男はそちらには向かわなかった。天候が悪かったわけではなく、4 月下旬の暖かくよく晴れた日であったことから、B 氏の長男はそちらに行けなかったのではなく、行く必然性を感じないため行かなかったのである。

その後 B 氏の長男は、父方祖先の墓とは反対方向に車で 10 分ほどの場所にある、母方祖先の墓へ向かった。この墓には、B 氏の長男から見て、母の父および母の父方祖母が埋葬されている。B 氏の長男は同行していた母親に、この 2 人が生前タバコを吸っていたかどうか尋ねた。吸っていなかったと B 氏の妻が答えたため、墓参りのときもタバコは供えられず、ザクロジュースのみが供えられた。B 氏の妻は、墓の上に生えた雑草を抜くなど墓の手入れも行った。

これらの事例からは、次のことが指摘できる。B 氏の長男にとって、吉報を報告すべき対象は父方・母方両方の祖先および親族である。逆に言えば、両方の祖先・親族がこの長男とつながっている。

また B 氏とその妻が直接顔を（そして生前の喫煙の習慣を）知っている範囲の祖先への墓参りが行われ、それより上の世代の祖先への墓参りは省略されている。従来であれば、母方はさておき、少なくとも父方に関しては、B 氏の長男にとって祖父より上の世代の祖先に対しても、墓参りをして吉報を報告すべきだと考えられるはずである。しかし B 氏の長男は、父方と言えども見知らぬ範囲の祖先への墓参りを省略し、その代わりに父方および母方の、父母が直接見知っている範囲の祖先への墓参りを行っている。そして B 氏とその妻も、長男のこのような行動を当然のごとく自然に受けとめている。

これらのデータや事例からは、家族・親族のつながりかたとその範囲の変化がうかがえる。つまり父系制の形式に則って父方の遠い昔からの祖先とのつながりに限定された認識から、父方および母方の直接見知っている範囲を、自らの働きかける、そして自らの生に影響を与える人々として認識し、彼らに対し家族・親族として行動する傾向へと変化している。

4. 家族がつながる場としての墓

近年の韓国で埋葬場所として増加しているのが、納骨堂である。納骨堂には、公営施設、宗教団体の施設、法人施設（注 6）などの種類がある [丁 2012]。

納骨堂の中には、財団法人（民間業者）によって都会の近郊に作られ、納骨堂の建物と共に公園が整備されているものもある。筆者はそのうちのひとつである「C 公園」を訪れた。「C 公園」は 5 万 5 千位を安置できる納骨堂を備えた、大規模な施設である。

「C 公園」はソウルの都心部から電車で 1 時間ほどの、京畿道の郊外に位置する。最寄り駅付近はソウルの通勤圏内の住宅地として開発されており、高層マンションが立ち並んでいる。「C 公園」へは駅から無料のシャトルバスで 20 分ほどかかる。車体に「C 公園」と大きく記されたシャトルバスは、平日は 1 日 3 往復、週末は 1 日 6 往復、最寄り駅と「C 公園」の間で運行されてい

る。バスで10分ほど走ると、林立していた高層マンションは姿を消し、畑や雑木林の間に、倉庫や資材置き場、中小規模の工場、ビニールハウスのパプリカ農園などが雑然と姿を見せるようになる。

それらのなかに「C公園」がある。バスを降りて正門をくぐり、坂道を上っていくと、横の壁には故人へのメッセージが書かれたタイルの装飾がある。

坂道を登りきって広場に着くと、左手前からトイレと家族休憩室のある建物、キリスト教徒専用の納骨堂、中央奥に記念塔。記念塔よりも奥には駐車場と売店・コーヒーショップ、公園がある。広場の右側にも二つ、納骨堂の建物がある（注7）。広場には幼児用の三輪車が数台おいてあり、訪問客の子どもたちが遊んでいる。家族休憩室のある建物の外壁には細長い電光掲示板が取り付けられており、家族らが携帯電話から納骨堂宛に送った文字メッセージ（SMS）が随時表示される。たとえば「おじさん、おばさん、私たちが来ましたよ」などのメッセージが表示されていた。

納骨堂の建物は、特にチェックを受けることもなく誰もが自由に出入りできるようになっている。各部屋にはドアがなく、廊下から中が見通せる。どの部屋も無臭で清潔感にあふれ、空調が効いている。各部屋の中央にはおしゃれな椅子がいくつか置かれている。

部屋の壁は細かいケースに区切られて分譲されており、各ケースにガラスの蓋が固定されている。ケースの位置によって値段は異なる。一番上と下に位置する段が安く、中央に近づくほど高くなる。2013年3月現在、個人用のケースは240～950万ウォン、夫婦用のケースは400～1,900万ウォンで分譲されている。これに加え、管理費が5年に1度ずつ、25万ウォン徴収される。

どの部屋も採光がよくて明るく、各ケースの装飾や花束などがカラフルで、派手な印象である。ケースの大きさは部屋によって異なるが、個人用のものはおよそ縦20cmほど、横30cmほどである。各ケース内部には、骨壺が入れているだけでなく、さまざまな趣向を凝らした飾りつけがなされている。例えば故人のメガネや携帯電話、住民登録証カード、花札などが入れられているが、装飾はそれらにとどまらない。ぬいぐるみや造花、ミニチュアの家具や食品サンプルなどを用いて、各ケースの内部はまるでひとつの部屋のように飾りつけられている。それらが上下左右に均等な区画で並んでいる様子は、韓国の都市部に立ち並ぶ高層マンションを見るかのようである。

ケース内部の飾り付けで最も多く用いられているのは、家族写真である。故人と見られる人物の写った写真のみならず、幼い子どもたちの写真もたくさん飾られている。筆者は最初、ケース内部が幼い子どもの写真で埋め尽くされているのを見て、幼児が亡くなったものと錯覚したが、骨壺に記された生年・没年を見ると故人は高齢で亡くなっていた。写真の幼児たちは、故人の孫やひ孫と見られる。韓国で高齢者の部屋に行くと、立派な額に入った孫やひ孫の生後100日あるいは満1歳の記念写真が壁にずらりと並んでいるのをよく目にするが、その光景と類似している。納骨堂の小さなケース内部は、家族を展示する場であるといっても過言ではない。



写真 3 納骨堂のケースのひとつ (筆者撮影、個人名と顔の部分は筆者編集)

納骨堂を訪れた客は、ケース蓋のガラスを磨き、生花の小さな花束をテープでガラスに貼り付けて帰ってゆく。ガラス蓋は固定されているため自由に開けることができず、職員に頼んで内側から開けてもらう仕組みになっている。そのため、たいていの客はガラス蓋を開けることまではせず、ガラス蓋の表面のみをいじって帰ってゆく。ガラスを磨く布や花束を貼り付けるテープは、納骨堂の事務室で借りることができる。花束でガラスが埋め尽くされ、中が見えないくらいのケースもある。また故人に宛てた手紙や、故人の孫や外孫が描いた絵が貼り付けられているケースもある。

これらの様子からは、故人に手紙を書いたり、家族写真を眺めて在りし日の故人の思い出に浸ったりする行為が、納骨堂において繰り返られていることがわかる。故人に宛てた手紙や家族写真を他人の目にも触れるように展示するという行為は、自分および他者に対して、家族としてのつながりを示し、認識させることにつながっている。これは前章で述べたような、直接見知っている範囲を、自らがつながる人々として認識し、故人の家族として行動するという傾向とも相容れる行為である。

墓は、家族として行動する場であり、それらの行為を通して再帰的に家族のつながりを生み出す場ともなっている。すなわち現代韓国において墓は、家族としてつながるための場として存在している。

5. おわりに

本研究では、墓の変化から韓国の家族の範囲とそのつながりかたの変化について検討してきた。そのなかでは、まず墳墓のデータを通して、婚入・婚出した女性や姻戚の名前を建立者として床石の側面に刻むという、従来見られなかったケースが相当な数におよんでいることを指摘した。

婚入・婚出した女性や姻戚の名前を床石に刻むケースは、もはやアブノーマルとは言えない数

に達している。故人と直接的な交流があった血縁者の名前を広い範囲で床石に刻んでいると考えられる。この現象から、墓の建立者として名前が刻まれる人物の選択が、必ずしも父系制の原理にとらわれなくなっていることが明らかになった。

また、既婚女性と実家とのつながりが、婚家とのつながりに劣らないほど濃く重要なものとなっていることを指摘した。インフォーマルな行為の面で既婚女性と実家とのつながりが重要であるのみならず、実家の祖先の墓の床石に子孫として名前が刻まれるということは、実家側も婚出した女性を家族の一員としてフォーマルに認めており、また女性側も自分とつながりをもつ家族として実家を認識することを示している。

さらには、男性にとっても、父系制の形式に則って父方の遠い昔からの祖先につながりを限定するという従来の認識が変化していることを指摘した。父方および母方の直接見知っている範囲を、自らの働きかける、そして自らの生に影響を与える人々として認識し、彼らに対し家族・親族として行動していることが明らかになった。

次に、近年増加しつつある納骨堂の事例について検討し、故人に宛てた手紙や家族写真を他人の目にも触れるように展示するという行為が見られることに注目した。その行為は、自分および他者に対して、家族としてのつながりを示し、認識させることにつながっている。これは、直接見知っている範囲を、自らがつながる人々として認識し、故人の家族として行動するという傾向とも相容れる行為である。

以上の検討を通して、墓は、家族として行動する場であり、それらの行為を通して家族のつながりを生み出す場ともなっていることを明らかにした。言い換えれば、現代韓国において墓は、家族としてつながるための場として存在している。自明のものとして認識される家族の中で墓が造られるという側面を無視することはできないものの、墓が家族のつながるための場になっていること、墓を通して家族のつながりが生み出されていることにも注目する必要がある。

これに対して従来の韓国の家族に関する研究では、父系制によるつながりを自明のものとして、人々の関係を検討してきた。それゆえに、墓の変化を始め、現代韓国社会において多様化する家族の様相について説明する術を持ち合わせてこなかった。

ここで人類学全体の研究を見ると、人々の相互行為から家族について分析するアプローチが提案され [Schneider 1984]、広く用いられてきた。このアプローチは最初から普遍的な家族の定義をするのではなく、「人びとにより生きられている〈家族〉を、あるいは〈家族ならざるもの〉を〈読む〉」[落合 1989: 165] という方法である。このようなアプローチで研究することが、韓国の家族に関する研究にも必要である。つまり、父系制や家父長制、儒教文化によって規定される家族を前提とするのではなく、家族としてつながる行為から、人々の関係を見るという視点が求められている。

上記で検討してきたような、墓をめぐる行為から人々の関係を見るとき、韓国の家族のどのような特徴が浮かび上がるであろうか。言い換えれば、韓国社会において墓を通して生み出されているつながりのありかたは、どのように特徴づけられるであろうか。このことを検討する一つの

視点として興味深いのが、中筋〔2006〕による死の類型である。

中筋は、死のありかたについて、死者の存在が生者の生活を規定する影響力の強弱と、成員の独立性の強弱を基準として、四つの象限に分類している。そのなかで伝統中国における死は「系譜の連続性の中の死」、つまり「死者の各々が、宗族の系譜的な連続性の中に、世代と長幼の順に基づいた位置づけを得」、祖先が子孫の現在の生活に影響を与えるものと位置づけられている〔中筋 2006 : 132-133〕。これは韓国で従来よく見られた墓のありかたの背景となる死生観とも合致する。これに対して現代日本における死は「〈我々〉の一員の死」、つまり「与えられた家や〈我々〉を出て新しい自己や〈我々〉関係を創出」し、「〈我々〉という情緒的な絆において死を捉える」ものと位置づけられる〔中筋 2006 : 256〕。

上で検討してきたような韓国の墓の変化を中筋の類型にあてはめてみるならば、韓国社会における死のありかたが、父系制による「系譜の連続性の中の死」の要素が色濃かった様相から、情緒的につながる親密圏の中での死、つまり「〈我々〉の一員の死」の要素が色濃い様相へと変化しつつあると考えることができる。納骨堂は父系制の系譜が不可視化されていることから、「〈我々〉の一員の死」の要素が特に強い。

ただし床石の変化から見ると、「系譜の連続性の中の死」の要素が薄まっているのは、あくまでも父系制という側面に限られていると考えることもできる。嫁や娘など父系制の上ではカテゴライズされない範囲の人々を含みつつも、血縁者の名前を床石に刻むという行為、ひいては床石を建立する行為自体、「系譜の連続性の中の死」の要素がある側面では健在であることを示している。床石は「特定の墓に眠る故人の〈名〉を後世に伝え、墓が遺失されるのを防ぐ記憶装置となる」〔本田 1993 : 152〕という特徴において、「系譜の連続性の中の死」としての側面が強いためである。

父系の祖先を無条件に〈我々〉とするのではなく、情緒的につながりのある血縁者を〈我々〉として再構築し、それを一族の誇らしい姿として、墓の床石を通して世に提示する。つまり近年の韓国における死は、「〈我々〉の一員の死」を「系譜の連続性の中の死」に組み込むという様相を見せている。言い換えれば、墓の床石をめぐる人々の行為は、親密圏としての家族における個人の死を、系譜の連続性の中に組み込むものとして考えることができる。

このことから、現代韓国の家族の特徴を次のように指摘することができる。人々は、従来の父系制に基づく家族の枠を越え、情緒的な連帯を基準とした親密圏としての家族を再構築するようになっている。その情緒的なつながりによる親密圏としての家族は、連続性をもつ系譜の流れの中に組み込まれることによって、格式高く体面を誇れるものとなる。この点で、韓国の家族のリアリティを構成するものは、情緒的なつながりと系譜の連続性の両方が強調される様相を呈している。

これは現代韓国社会の家族が置かれている状況ともつながるものである。岡田によれば「韓国の民族文化には、近代化を図る過程で社会がモダンティを受容しなければならない一方で、植民地経験があるがゆえに「前近代」に形成された民族の「伝統」を強調し、維持しなければならない

い。この矛盾が集中的に現れるのも、家族の領域である」[2012:140]。

本研究で扱ってきたような、墓をめぐる現象も、このような状況を背景とするものであると言える。ただし墓の事例から見ると、人々が強調する連続的な系譜は、一見すると父系制の「伝統」に従っているかのように見えるが、その内実は、より広い範囲を含んでいる。よってこれは先行研究で論じられてきたような、「伝統的」要素が残存しているという様相ではない。また岡田の論じているような、「前近代」に形成された民族の「伝統」[2012:140]とも、その内実を異にしている。床石の変化から見られるように、人々の強調する系譜の連続性の内実は、もはや父系制ではなく、より広く流動的な境界線をもつカテゴリーの中で考えられているからである。

今後の研究では、現代韓国社会において生かされている家族のありかた、すなわち人々が家族としてつながる様相について、より広い視野から重層的に描き出し、検討してゆくことが必要であろう。

表3 床石の側面に刻まれた建立者の内訳（故人との間柄）（付録）

床石 識別 番号	建 立 年	息 子	娘	孫 息 子	孫 娘	嫁 (注8)	娘の夫 (注9)	外孫 息子 (注10)	外孫 娘 (注11)	曾孫息子 以降の直系 男性子孫	曾 孫 娘	その他 (男)	その他 (女)
1	1993	○		○									
2	不明	○											
3	2004	○		○						○			
4	1999									○		○	
5	1999									○		○	
6	1991									○			
7	2000	○		○						○			
8	2004	○		○						○			
9	2004	○		○						○			
10	2000	○		○						○			
11	2000									○			
12	2000			○									
13	2007	○		○						○			
14	2007	○		○						○			
15	2006	○		○						○			
16	1991	○		○									
17	1982	○		○						○			
18	2009	○											
19	1997	○		○									
20	1997	○		○									
21	1967									○			
22	不明	○											
23	1989			○						○			

106	1993	○											
107	1987	○											
108	1993	○											
109	1987	○		○									
110	1958	○											
111	1991	○		○									
112	不明	○											
113	2003	○											
114	1968	○											
115	2009	○											
116	1995										○ (弟)		
117	1981	○											
118	1984	○											
119	1983	○											
120	2001	○											
121	1976	○		○									
122	1973	○											
123	不明								○				
124	1989	○		○	○								
125	2000	○		○					○	○			
126	1990	○		○	○				○				
127	1993	○	○				○						
128	2003	○	○				○						
129	1993	○	○				○						
130	2006	○	○				○						
131	2006	○	○				○						
132	2001	○	○				○						
133	1994		○				○						
134	1999	○	○	○			○	○	○	○			
135	1991		○				○						
136	2004	○	○	○	○		○	○	○				
137	2002		○				○	○					
138	2001	○	○	○	○			○	○				
139	2009	○	○				○	○	○				
140	1998	○	○	○	○		○						
141	1998	○	○	○			○						
142	1993	○	○	○			○						
143	1998	○	○	○	○		○						
144	1997	○	○	○			○						
145	不明	○	○	○			○						
146	2003	○	○	○	○		○						

188	1989	○	○									
189	1993	○	○									
190	2004	○	○									
191	1996	○	○									
192	2001	○	○									
193	2006	○	○									
194	2001	○	○	○								
195	1997	○	○	○					○			
196	2006	○	○	○								
197	1981	○	○	○					○			
198	2007	○	○	○								
199	2009		○									
200	2009		○									
201	2004		○									
202	1999		○									
203	1998		○									○ (姪)
204	2004	○	○	○	○							
205	1982	○	○	○	○					○		
206	1994	○	○	○	○							
207	2005	○	○	○	○	○						
208	1997	○	○	○	○	○	○					
209	2009	○	○	○		○	○					
210	2007	○	○	○	○	○	○					
211	2010	○	○	○		○	○					
212	2005	○	○	○		○	○		○			
213	2009	○	○	○		○	○					
214	不明	○	○	○	○	○	○		○			
215	1991	○	○	○	○	○	○			○		
216	2009	○	○	○	○	○	○		○	○		
217	1991	○	○	○		○	○					
218	2003			○	○	○	○		○			
219	2009	○	○	○		○	○		○			
220	2009	○	○	○	○	○	○	○	○			
221	2004	○	○			○	○					
222	2009	○	○			○	○					
223	2006	○	○			○	○					
224	2008	○	○			○	○					
225	2009	○	○			○	○					
226	不明	○		○		○			○			
227	1999	○		○		○						
228	不明	○		○		○			○			

229	2005	○		○		○				○			
230	不明	○		○		○				○	○		
231	2011	○		○	○	○							
232	2010	○		○	○	○							
233	不明												
234	2004												○ (姪 + 姪孫)

注

- (1) このフィールドワークにあたっては、公益財団法人 三島海雲記念財団から研究助成を受けた。
- (2) チェサとは、心霊や死者の魂に対し、食べものを供えて誠意を表すこと、およびその儀式を指す。また、坐の方角とは、墓の向いている方角を指す。
- (3) 写真に写っている人物は、下段中央が B 氏、下段右側が B 氏の妻の姉、下段左側が B 氏の妻の姉の娘の夫、上段左側から順に B 氏の妻の姉の娘、B 氏の長女、B 氏の妻、近所の人。写真には写っていないが隣の部屋に B 氏の次女、および B 氏の妻の姉の娘の子ども 2 人がおり、奥の部屋には B 氏の母および B 氏の妻の母がいた。
- (4) 「ご飯を食べなくてもおなかがいっぱいでしょうね」とは、幸せな境遇にある人を羨んでかけられる言葉である。例えば B 氏の妻は自分の子どもたちが 30 歳近くなくても誰一人結婚しないことに気をもんでおり、B 氏の姉の子どもたちがみな結婚・出産していることを羨んでいる。親戚の結婚式の会場で子どもや孫たちに囲まれた B 氏の姉の夫に対して、B 氏の妻はこの言葉をかけた。
- (5) B 氏の父親と B 氏の妻の父親、つまり B 氏の長男にとっての父方祖父と母方祖父は、既に亡くなっている。
- (6) 民間業者は遺骨 500 基以上を安置できる納骨堂を運営するためには財団法人を設立しなければならない。
- (7) この 2 つの建物では大部分の部屋において各故人の宗教が入り混じっている。しかし中にはカトリック教徒ばかりが集まった部屋もあり、その部屋には聖母像が置かれている。
- (8) ここには故人から見て、息子の妻だけでなく、孫息子の妻や、曾孫以降の直系男性子孫の妻も含まれる。
- (9) ここには故人から見て、娘の夫だけでなく、孫娘の夫、曾孫娘の夫も含まれる。
- (10) ここには故人から見て、外孫息子（娘の息子）だけでなく、外曾孫息子（娘の孫息子）も含まれる。
- (11) ここには故人から見て、外孫娘（娘の娘）だけでなく、外曾孫娘（娘の孫娘）も含まれる。
- (12) この文脈において岡田は、カジョクとは欧米の「近代家族」の要素が韓国に受容されローカライズされた家内的集団のありかたを指す言葉として、チブとは父系血縁に基づく韓国の「伝統的」な家内的集団のありかたを指す言葉として用いている。

引用文献

〔日本語〕

李光奎・末成道男

1973「慶尚北道百忍・中浦両部落調査予報——とくに家族・親族について——」『東洋文化』53: 41-78。

岡田浩樹

2012「現代韓国の「家（カジョク）」に関する人類学的理解の試み」風間計博・中野麻衣子・山口裕子・吉田匡興（共編著）『共在の論理と倫理——家族・民・まなざしの人類学』、121-146 頁、東京：はる書房。

落合恵美子

1989『近代家族とフェミニズム』東京：勁草書房。

河合利光

2012「家族・親族研究の復活の背景」河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』、15-44 頁、東京：時潮社。

澤野美智子

2011「女性のライフコースを通して見る家族時間の変化：韓国近代戸籍の分析を中心に」『神戸文化人類学研究』3:33-54。

重松真由美

1982「韓国の女」綾部恒雄編『女の文化人類学』、197-223 頁、東京：弘文堂。

ジャネリ、R・任敦姫

1993『祖先祭祀と韓国社会』（樋口淳・金美榮・近藤基子訳）、東京：第一書房。

末成道男

1986「韓国の社会組織——そのヴァリエーションをめぐって」竹村卓二編『日本民俗社会の形成と発展——イエ・ムラ・ウジの源流を探る』、101-123 頁、東京：山川出版社。

田中悟

2010「現代韓国における葬墓文化の変容——納骨堂を中心に——」『大阪女学院短期大学紀要』40:19-36。

田中悟

2011「韓国・納骨堂に見る死者とのコミュニケーションの試み」『宗教研究』84-4:461-462。

丁ユリ

2012「韓国の大都市とその周辺部における納骨堂－儀礼・追慕の形式の変化と新しい死と生の空間の形成」『死生学研究』17:51-153。

中筋由紀子

2006『死の文化の比較社会学——「わたしの死」の成立——』千葉：梓出版社。

中村八重

2001「現代韓国における火葬と「孝」の理念」『アジア社会文化研究』2:41-54。

本田洋

1993「墓を媒介とした祖先の〈追慕〉：韓国南西部一農村におけるサンイルの事例から」『民族学研究』58-2:142-169。

丸山孝一

1983「韓国社会における内と外の展開」江渕一公・伊藤亜人編『儀礼と象徴——文化人類学的考察——』、443-466 頁、福岡：九州大学出版会。

安田ひろみ

1997「韓国の女性——儒教的規範の裏側、ムダンの世界から」綾部恒雄編『女の民族誌Ⅰ——アジア編』、39-64 頁、東京：弘文堂。

山根真理

2005「韓国の家族とジェンダー——女性のライフコースと育児援助を中心に——」北原淳編著『東アジアの家族・地域・エスニシティ——基層と動態——』、77-94 頁、東京：東信堂。

レヴィ＝ストロース

1978『親族の基本構造』上・下（馬淵東一・田島節夫監訳）、東京：番町書房。

〔韓国語〕

김두현

1994『한국가족제도연구』서울:서울대학교출판부。

여중철

1977「한국농촌의 가족주기와 가족유형」『한국문화인류학』8-1:25-37。

이광규

1977『한국가족의 구조분석』서울:일지사。

이재경

2011『가족의 이름으로——한국근대가족과 페미니즘』서울:또하나의문화。

조혜정

1986「가부장제의 변형과 극복: 한국가족의 경우」『한국여성학』2:136-217。

정영애

2010『가족과 젠더』과주:교문사。

최백

1981 「한국의 집—그의 구조분석 : 큰집, 작은집 관계를 중심으로」 『한국문화인류학』 13 : 119-135。

최길성

2010 『한국인의 조상승배와 효』 서울 : 민속원。

[英語]

Evans-Pritchard, E. E.

1940 *The Nuer*. Oxford: The Clarendon Press.

Goodenough, W. H.

1970 *Description and Comparison in Cultural Anthropology*. Chicago: Aldine Publishing Co.

Morgan, L. H.

1877 *Ancient Society, or Researches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization*. New York: Henry Holt.

Radcliffe-Brown, A. R.

1952 *Structure and Function in Primitive Society*. London: Cohen & West.

Schneider, David M.

1984 *A Critique of the Study of Kinship*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.